

the circle salamander in

第三十一章

ボムソワールの劇場

峯村 明

Salamander in the circle

第三十一章の登場人物

マミヤ	……	ホシナ族の娘
ホシナ	……	ホシナ族の族長 マミヤの父
スクナ	……	島の王に仕える者
バラム&バランケ	……	パンテオラが飼っていたジャガー
シパド	……	ベレオーサ総督
ドウル	……	シパドの兄 ベレオーサ家当主

これまでの主な登場人物

ネウトラ評議会	ハイヤーン	本部科学者のリーダー	世界の果ての島	ホシナ	ホシナ族の族長 マミヤの父
	ティコ	科学者		オマキ	ホシナの妻
	ナシル	本部・事務職員		キト・コマ	ホシナ族の男たち
	ヤスウ	学術調査団の団員		ゴン	ホシナ族の男 (ヤサカオ族出身)
	ターヴェ	学術調査団の団長		サノヒコ	王に仕える役人
	ヒューダー	学術調査団の団員		フツヌシ	王に仕える者 将軍
エウメロス王国	レル・ヴァリス	王宮付近衛隊長	ヤサカオ	ヤサカオ族の族長	
	ヴァリス将軍	レルの父	チドリ	アマセオの妻	
	カール	王子 ヘルガの弟	ハマツ	チドリの養父	
	ロウナス	国務省の高官	タマシギ	ハマツの妻子	
	アンテロ	レルの副官	オモイカネ	世界の果ての島の王に仕える者	
	摂政	亡国王の弟	コタエ	"	
ケストル王国	ヘルガ	王女	スクナ	"	
	パウル	国王	アマノカガセオ	シトリ族を去った兄弟	
	ウルリク	第三王子			
	ヘンリク	ウルリクの息子	メッサナ市	パンテオラ	メッサナ市の総督
	ホバオク	ケストル人の美女	メルノ	音楽家	
	ソルド	闘技場の警備隊長	バルタリス	メッサナ総督家の一人 臨時総督代理	
黄金門市	皇帝	皇帝	メンドルブ	メッサナ化学者団の代表	
	バイスロイ	皇帝の息子	バラム&バランケ	双子のジャガー パンテオラの部下	
	パソネル	バイスロイの参謀	冥界	冥界王	冥界の王
アンベレオ	ソラン	祭祀長	ベネトナシュ	死神	
	レガリオ	アンベレオ王国の王	テクトリ	最下層ミクトランの主	
			プラトニオ	メッサナを追放された化学者	

目次

ボムソワールの劇場

468.

469.

470.

471.

472.

473.

474.

475.

476.

477.

478.

第三十一章のあとがき

back number

奥付

ボムソワールの劇場

468.

「族長」

スクナは静かに声をかけた。

ホシナ族の族長ホシナは金星との対話を日課としている。金星は彼らを導く星である。太古の昔、ホシナ族の祖先は導かれて北方から世界の果ての島へと渡り、島の王の船を賜って、さらに大海を渡った。今はアトランティス大陸のはるか西方……詳しく言えばメッサナのほぼ真西の海上にある、無人の火山島にいる。上空を東から西へ流れる気流があるが、それでも、大陸を汚染した放射能雨もここには及ばなかった。

彼らはなだらかな丘に仮の居を構えていた。丘には世界の果ての島では見られなかった常緑樹が茂り、芳香を漂わせていて、ホシナ族はいっぺんで気に入った。その丘を下って海岸に出、岬のように突き出した岩山に登り、ホシナは瞑想する。満天の星の下、潮風はさわやかで、波は単調ながら穏やかな音で寄せ続ける。彼らがこの火山島へ来てから大きな嵐に遭ったことはまだない。だが時折、夕刻にまとまった強い雨が降り、そのおかげで真水は豊富にあった。

世界の果ての島と較べれば、較べようもないほど自然は穏やかで、まるで天国のようだ。しかしそのことはホシナ族にとって大きな悩みだった。

そこは火山島であるが、未だ若い火山島らしく、火山噴火から生まれる黒曜石は存在しない。狂暴な獣もいなければ狸も狐もない。だが食用になりそうな植物は豊富、つまり、本来植物食主体の彼らに、狩りをする必要などまったくないのだった。そして、そ

こは彼らを必要とはしていない。

それゆえ、ホシナ族のなかでこの地を安住の地と考えている者はひとりもいなかった。最年少の三歳の幼児でさえ。

どれほど気候風土に恵まれた天国であっても、彼らの住む土地ではなかったのだ。

とはいえ、彼らは山の民であって海洋族ではない。その彼らがいったいどうやってここまで来たのかといえば、王の船によってであった。それは空を飛ぶ船だったのである。そして、ここへ到着して以来、船は沈黙している。

我らは何処かへ赴く途上にいるのだというのが、ホシナ族全員の見解であった。

469.

「なあ。貴方はどう思われるか。スクナどの」

スクナが声をかけてから星々の位置はだいぶ変わっていた。ホシナが返事を返すまで、ふたりは黙って延々と星空を眺めていたのである。東の水平線の彼方はほんのりと明るくなり始めている。

スクナはぼりぼりと顎をかきたい衝動を抑えていた。族長ホシナは深い悩みのなかにいる。一族の者を率いる立場にいる者の苦悩というものを、放浪者スクナにも察するくらいのことではできた。

ホシナがなにを悩んでいるかといえば、彼らを導く星が沈黙していることだ。また、彼らをこの火山島までいざなった島の王の船も着陸したきり、動こうとしない。

悩みはもうひとつある。いや……悩みというより、金星の指し示す道を、ホシナ自

身、読み取る力を失いつつあるのではないかという疑いだ。この時代の人の平均寿命はおよそ五百歳である。後世の人間が考えるほど短くない。しかし、気候の激変、食料環境の激変が少しずつ、人体の寿命に影響を及ぼしつつあった。彼らの主食である植物が育ちにくくなり、動物食を取り入れざるをえなくなった結果だった。島の王はそのことを懸念したためにホシナ族に動物捕獲用の道具としての黒曜石加工と、動物食の弊害を緩和するための食物、うると菜の栽培許可とを与えたのだった。

それは置いて。

族長ホシナは老人ではない。それどころか若者の部類なのだ。若者が己の能力が失われつつある、限界を感じつつあると感じることがいいわけがない。実はスクナはそう思っていた。どう思うかと問われ、そう答えればよさそうなものだが、さすがに本人にそう告げることは憚られると思うスクナである。さまざまな出来事が重なり、ホシナは疲れているのだと思う。それに――

「すぐに答えを見つけねばならぬものでもありますまいて。ゆっくり、時間をかけて道を探ればいかが」

そう重い口調で答える。

「まだ、時が来ていない。それだけのことだと、私は思う」

ホシナはちらりと、ずっと立ちっぱなしのスクナを見上げた。

「ずいぶん、重々しい云われれようですな」

「気楽に言った方がよかったですか」

「うーむ。それはそれでむかつくでしょうな」

「でしょう？ かつて経験したことの無い環境のなかで、一族の行方を、舵を取らねばならない。あなたの族長としての立場も負っておられる責任も、私はわかるつもりだ。

しかしだからこそ、焦りは禁物ではなかろうか。迷いがあるなら存分に、時間をかけて、迷えばよい。答えは必ず見つかる。道は必ず拓ける。守護の星はけっしてそなたらを見捨てたりせぬ」

スクナはきっぱりと断言した。そうあってほしい、そうあるべきだと思いながら。そして、（それよりも、だ）と胸中に思いつつ、彼は言った。

「異郷に一人でいる娘御に、祈りを送ってやったらどうだろうか」と。

ホシナの娘マミヤはまさにそのころ、異郷の地で孤軍奮闘していたのだ。

470.

マミヤはなんとなくわかってきた。

ベレオーサ・シパドという女は、（私とバイスロイさまがなにかとくべつな関係にあると思ってるの?? つまり、私に嫉妬してる、そういうこと??）

ざんねんだけど、シパドさん、バイスロイさまはご自分のことはあんまりお話にならない方だし、ヘルガ王女さまと政治上の目的で婚約してたくらいのことしか、私は知らないのよね。それに例の黒曜石の短刀は、イリチャからヘルガさまへ、ヘルガさまからバイスロイさまへ護身用に手渡されたというから、どうぞそのままお持ちになってください、ってことなだけで。私のことはヒューダーが守ってくれるだろし、それに私が好きなのは……

マミヤは柄にもなく、ぽっと頬が赤らむのを感じた。あらためて言葉にしてみると、（見ず知らずの土地でヒューダーを待っていたのは、そういうことだったんだわ!）

なにを今さらな観があるが、そういうことだったのだ。

異国の娘の、南国の強い日差しに日焼けした褐色の肌、健康的に引き締まった手足の筋肉、黒曜石のような黒い瞳をきらめかせ、頬を染めている様はシパドをどうしようもなく、刺激した。シパド自身、この娘を目にしたとたん、異様に心が波だった。バイスロイをはさんでこの娘をライバルと認めたからかもしれない。もしかしたらこの娘は二十人いるというバイスロイの妻のひとりかもしれなかった。それとも、二十人を超えた、妻以外のなにかか。シパド自身はそのような範疇にはいることすら拒否された。バイスロイのこの罪な出まかせは、バイスロイをより魅力的に見せてしまい、得体のしれないマミヤという娘を憎ませてしまった。

許さん。

シパドの胸中にはそのひとことがめらり、と燃え上がった。

471.

ベレオーサ家の当主にしてシパドの兄、ドゥルが本国からやって来た。

実は……ドゥル自身は、かつてのメッサナという街が好きだった。そこに住む人々はみな生き生きと明るく、活気があり、自信に溢れ、街は沸き立つようなエネルギーに満ちていた。しかし猥雑ではなく、清潔感があった。治安部隊も軍隊も持たず、街を囲む高い壁もない。なにものに対しても開かれた街だったのだ。だから誰も、この誇り高く、気高い街を侵そうとは考えなかった。そんなことをすれば己自身の誇りも気高さも

否定することになるからだ。ドゥルはそう考えていた。

そしてできるものなら、人々のなかに入りこんで、彼自身が持つ魂の本質というものを輝かせてみたいものだとかっそり夢想した。ベレオーサ家の長男にそんなことが許されるわけもなかったから、禁断の夢想は、若き日の夕暮れ、彼の心の奥深くにしまわれて嚴重にカギをかけられた。

かつてひそかに憧れたメッサナに統治者ベレオーサとして降り立ったとき、彼は自分自身が引き裂かれるのを感じた。

なんだ これは

陰鬱な目を向けてくる人々は何者だ

ターコイズの青で彩られた家々はどこへ行った

人々の間を闊歩していた優雅なジャガーたちはいったいどこへ

空気が淀んでいる

腐臭

ここはメッサナではない

ここは

ベレオーサだ

これがベレオーサだ

ドゥルは鬼のような形相であたりを見回した。

数百年かけて築かれた美しいメッサナを一夜にして破壊したのはベレオーサだ。彼が頂点に立つ一族だ。

ドゥルは咆哮した。それは勝利の雄たけびか。否。恥ずかしさのあまり彼の良心が放った悲鳴だった。

472.

シパドは懸命に頭を絞った。どのような方法ならマミヤという娘を効果的に苦しめることができるかという事案で。

少なくとも、総督職就任直後の人間がするべきことではなかった。早急にすべきこと、考えるべきことは山積していたのだ。

ドゥルは妹シパドのバカさ加減には辟易していた。アンベレオ王家（の実力者）からの要請でシパドの行動を監視するためにやって来たのだが、そもそもシパドをベレオーサ市の総督に指名し、奪還後の旧メッサナにベレオーサと名付けたのは“彼ら”だ。“彼ら”自身が監視するのが筋というものではないか。不満と文句ではちきれんばかりのドゥルである。

一方のシパドはアンベレオ王家といえは幼馴染で自分より三つも年下のレガリオのこ

とだという認識であるから、王家を頭っから舐めていた。そして激しやすい性格で己に甘く他人に厳しい者の常として、周囲にいるのはあるじの下命に諾々と従うイエスマンばかりである。よってシパドにはその言動を諫める者も意見を奏する者もいなかった。だいたいそんなことをしようとしただけで首が飛んでしまうのだから。

ドゥルの目には、シパドは全身の毛を逆立て目の色を変えた小動物にしか、映らなかった。まるでけものじみていた。それも牝のけものだ。その発端が例の良人に関することだと知ってドゥルは絶望的な気分で天を仰ぐ。あまりにも——バカげていた。

いっそのこと、あのと時の男を捜して連れ戻そうかとも考えたが、どこの誰ともわからない。名前はバイスロイというらしいが、（バカバカしい。それは黄金門の後継者の名ではないか！ そんな名を僭称するとは世間知らずにもほどがあるわ。ようするに、単なるバカ者だ！）、というので一蹴してしまう。

総督府の一室をいらいらと歩きまわりながら彼は考える。故郷の領地の城を出る前にもたらされた話を思い返す。ベレオーサ家の何代か前にアンベレオ王家へ嫁いだ女性がいる。そのひとは後継を次の代に譲ってから経済界に入り、ながいこと権力を握っていた。が、権力闘争に敗れたのではないかという噂が流れているのだという。

（大叔母上はけっこうな高齢にもかかわらず、よくぞ頑張ってこられた。おかげで我々ベレオーサの者もいい思いをしてきたわけだ。此度のメッサナ攻略も経済界からの指示。つまり大叔母上が関わっておられる。その大叔母上は、敗れた？）

いやな予感しかしない。もし、メッサナ攻略が失敗したとなれば、“大叔母上”の競争相手はその責を当然ベレオーサ家に負わせるにちがいないのだ。

だというのに、肝心の総督は目の前の嫉妬に狂っているのだった。

473.

シパドは突然いいことを思いついて、あまりの妙案にすっと食事の席を立った。

同席していたドゥルは妹の奇行には慣れていたが、その傍若無人ぶりに磨きがかかっていることを知った。総督という重職につけばそれが重しになるかもしれないという考えは甘かったとわかる。

「妹よ、いったい何事か。どんな急用か」、と声をかけてみたが、シパドはなにも答えずに食堂を出て行ってしまい、それきり戻って来なかった。

*

シパドが供も連れずに足を運んだ先は、無残に焼け焦げ、崩れ落ちた石が散乱する、ボムソワール一族が暮らしていた屋敷の跡。彼女がバイスロイを初めて見かけた場所だ。深く物思いに沈んだ横顔にシパドはひとめぼれしたのだった。この場所は彼にとってなんなのだろうという疑問がずっとシパドの心の中でくすぶっていた。彼はただ物珍しさと好奇心で眺めていただけだと言っていたが……

バイスロイがどんな動機であの廃墟を眺めていたのかは、シパドにはどうでもよかった。要は、バイスロイを引きつけるなにかがこの場所にあるということだ。シパドは周囲を見渡し、にっ、と笑った。なんという好都合か。広大なこの焦げた廃墟は、さらに大きな野外劇場の一部だったのだ。

ケストル王族の闘技場といい、権力を持つ者は大規模な見世物が好きだ。だがメッサナの野外劇場は見世物のためでも権力者のためのものでもない。劇を演じ、舞い、詩を

詠み、音楽を奏で、演者は観客とともにその世界に没頭する。ただそのためにだけ造られた。ボムソワール家のものだが、規模があまりに壮大で、そのことを知っている市民はほぼいなかったくらいである。それゆえに、放火を免れたともいえる。ボムソワールの野外劇場はまったく無傷で市街の一面に聳えていた。

ここなら、とシパドはほくそ笑んだ。ここなら大勢の人間を集められる。そしてあの生意気な娘を思う存分、辱めることができるにちがいない。

474.

地下からの階段をまっすぐ上がっていくよう促され、云われた通りにすると、いきなり目の前が開けた。

(なんなのかしら——これ——)

この時代の石造建造物の常として、石の壁には単なる壁以上の機能がある。たとえば照明の役目をもっていたりするから、地下を歩いている視界にはなんの不自由もない。だが地下階段を上りきって地上とおぼしき場所に出てみると、そこは広く、開けていて、真っ暗だった。

真っ暗。原始の自然の暗さではない。人工的な暗さだ。なぜなら、人の気配を感じる。暗闇の中に大勢の人がいて、息をひそめている。そして人々の視線はある一点に集中している。マミヤ自身に。マミヤは白い衣装を身に着けていた。神殿で祈るためにその格好で出かけた、そのままだ。暗闇の中で白い色ははっきりと浮き上がって見えた。人の目を引くのも当然。

(——なんなのよ——)

暗闇を怖いとは思わなかったが、彼女を戸惑わせたのは人々の視線のむこうにある意識だ。怯え、そして、怖れ。激しい緊張。それらがまるで集中線のようにマミヤの身に注がれている。

(なに？ なにを怖れているの——)

ふと、空気が動き、異臭が漂った。

(動物の匂い——？)

それも、不潔な動物の体臭だ。

ことさら目を凝らさずとも、前方に金色の、小さな光が浮かんでいるのが見える。さきほどまでなかったものだ。それが、ふたつ、よっつ、むっつ、と、しだいに増えていく。それらは地面からかなり高い位置にあって浮かび、わずかに上下に動いている。

マミヤは直観した。

ジャガーだわ！！

突然、あたりが明るくなった。金属製の籠に盛られた木片に火がつけられたからだ。火は赤々とその空間を照らし出した。

ケストルの闘技場に似ている、といっしゅんマミヤは思った。空へ向かって階段状に造られた観客席、巨大なすり鉢の底にいる自分を感じる。マミヤ自身はすり鉢の底三分の一ほどに張り出した舞台の中央にいて、かがり火は舞台を囲み見おろす観客席の弧に沿って並んでいた。

ジャガーたちは舞台の正面に位置する、別の地下通路から地上へ上ってきたらしい。夜目が利く彼らには突然の明るさはいきなり真正面から強烈なスポットライトを当てられたようなものだっただろう。彼らは怯え、ひるみ、毛を逆立て、唸った。

その様は、わけもわからず劇場に集められたメッサナ人にとっても声を失う衝撃だった。

ある日の昼下がり、檻に入れられて連れ去られたかつての友人たちがそこにいたのだから。しかし友人たちはすっかり変わり果てていた。卑屈な目をし、やせこけ、艶やかに輝いていた毛並みはぼさぼさになって汚れていた。食餌も満足に与えられず、虐待されていたのだとひとめでわかる、見るも無残な姿。

観客たちは言葉を失い、目は飢えたジャガーの群れと舞台の上の白い衣装の娘との間を行ったり来たりした。観客たちはこのショーの意図に、ようやく気づく。

飢えたジャガーに娘を襲わせようというのだ！

476.

マミヤは目を瞞って、前方へ歩いた。ジャガーたちの群れに向かって。

地鳴りのように、観客がどよめき、劇場全体が震えた。メッサナ人はジャガーというものをよく知っていた。友人としてだけではなく、動物としての彼らの能力、たとえば彼らがいかに高く遠くへ跳躍するか、いかに強靱な顎と鋭い牙を持っているか、いかに微細な匂いを嗅ぎ分けるか。

もつとも、そんな知識はなくても、飢えて腹をすかせた動物がいかに危険か、ちょっと考えればわかるというものだ。

どよめきはマミヤに対する警告であり、間近に迫った光景の予感への慄きだった。

マミヤは先頭の一団にいる一頭のジャガーを見つめていた。ジャガーもまたじっと彼女を見返してきた。マミヤはだてにホシナ族の一員だったわけではない。野生の動物に対するすべをあれこれわきまえていた。野生動物、とくに肉食動物と目を合わせるなど、決してやってはいけないことのひとつだと、幼いころから身につけていた。しかし、（この子——）このジャガーは野生動物でも肉食動物でもなかった。

「あなたは、バラム、そうでしょう？」

マミヤの舞台上でのつぶやきは、劇場の隅々にまで届いた。すり鉢状の劇場はそういった音響効果を計算の上で設計されている。

そしてマミヤは聴いた。（その通り。私はバラムだ）、という返事を。（貴女はマミヤ。ヒューダーを愛する者）

思いがけない返答にマミヤは面喰った。「あなたには私の気持ちがわかるというの!？」

（むろん。私もバランケも、貴女のいつわりのない気持ちをよく知っていた）

「そうよ！」マミヤは昂る気持ちを抑えられなかった。「そうよバラム！！ 私は愛している！！ ヒューダーを！ バランケを！ あなたを！ あなたの仲間みんなを！！」

そのとたん、劇場の地面が、ざあっ、と鳴った。ジャガーの群れが一斉にその場にひれ伏した音だった。

バラムだけがマミヤのもとへ歩み寄り、彼女が差し出す手に顎を乗せた。黒いジャガーは痩せて貧相だったがその動作はしなやかで、美しかった。

477.

「シパド総督さん！」

マミヤは舞台の上で声を張った。このショーを仕組んだのはあの女だということはどうに気がついていた。

「ジャガーたちをもとのおうちに帰してあげて！　せめて食べ物をあげて！」

観客席がどよめき、人々が立ち上がって動いている。眼下に自分の友人を見つけた人たちだ。ひれ伏していたジャガーたちのなかにもそわそわとした雰囲気生まれていた。

ちっ、と舌打ちが聞こえたようだった。シパドの思惑はまったく違う方向へと展開してしまった。

飢えたジャガーが娘を襲うどころか、娘はジャガーを手なづけてしまった。そのうえ娘はジャガー開放を要求し、旧メッサナ市民もジャガーらも娘の味方だ！

ここで反乱でも起こされたら元も子もないくらいのはさすがのシパドにもわかった。思惑は大失敗だがなんとか收拾をつけねばならない……

いっしゅん、立ち往生したシパドだったが、頭の中にすばらしい考えが閃いた。そうだ、逆手にとってやれ！

この劇場にはもともとなかったものだが、彼女は急ぎよ、ロイヤル・ボックスというものを作らせていた。バルコニーつきの特等席である。バルコニーの枠はコンゴウインコの極彩の羽根で豪華に飾られ、観客席からは見えないが総督席にはまだらジャガーのふかふかした毛皮が敷かれていた。

生死にかかわらず、その毛皮を剥ぐ。メッサナ人が絶対やらないことだ。友人の皮を剥ぐなどあり得ないからだ。だから毛皮だけがその持ち主を離れて存在することはあり得なかった。つまり総督席の毛皮はメッサナ人以外の者のしわざだった。毛皮の持ち主は衰弱して汚される前の、健康な状態だったときに殺され、総督の尻に敷かれたのである。

動揺する市民らに語りかけるべく、シパドが席を立った、その時。

マミヤはバラムの顔色がさあっと変わるのを見た。バラムの金色の目は裂けんばかりに吊り上がり、顎はずれんばかりに上下に開いた。マミヤの知っているジャガーの顔ではなかった。マミヤばかりではない、メッサナ人のだれひとり、ジャガーに秘められたそのような狂的な面を目にした者は、かつてひとりもいなかった。

そしてジャガーは吠えた。ぎゃああああ、と、喉を引き裂くような、猫族の絶叫。シパドが席を立ったとき、バラムは弟の匂いを嗅いだのである。

バラムはマミヤの目の前から、ふっ、と煙のように消えた。一瞬体を丸めて力をためた彼は次の瞬間には体をひるがえし、パワーを解き放っていた。

478.

観客に向けて一席ぶつべく、バルコニーの端へ歩もうとしたシパドの眼前に、バラムは躍り上がった。そこに立つ女の全身から弟バランケの匂いがする。それも血の匂いだ。人間にはまるでわからないレベルであってもジャガーには一目瞭然の事実。それはバラムを逆上させ、我を忘れさせた。

ベレオーサ・ドゥルはそのようすをシパドの背後から見ていた。

今まさに、妹シパドがジャガーに喰いつかれようとしている。彼は妹を脇へ突き飛ばすか、それとも己が妹の前へ飛び出すか、一瞬、ほんの一瞬迷った。そして結局、なにもしなかった。

思いもよらない事態に頭が働かなかったとでも、体が凍りついてしまったとでも、どうにでも理由はつけられた。だが彼は己の意志で、なにもしなかった。それどころか、この女は不慮の事故によって葬られるべきだと、その一瞬間に明瞭に考えていたのだった。彼は視界の隅に、ロイヤル・ボックス席周辺の者たちの表情に同じ期待が浮かぶのをとらえてさえた。

本来のバラムならば、彼らの期待に、優に応えられた。目にも止まらぬその電撃的な

攻撃に人間はかないはしない。だが……

空腹では戦えないということわざがこの世界にあったかどうか。

バラムはあまりに衰弱していて、気力に体がついていかなかった。シパドが反射的な動きで真っすぐに突き出した短刀をかわすことができなかった。

異国の黒曜石の短刀は吸い込まれるように深々とバラムを貫き、心臓を抉った。

第三十一章 『ボムソワールの劇場』

第三十二章へ続く

第三十一章のあとがき

第六部は第二十六章の『ジャガー狩り』で始まりました。
狩られたジャガーたちがどうなるのかまでは考えていなかったのですが…バラムとバラ
ンケの最期がこうくるとは。書いてる本人がショック。しばらく書けないかもしれない。
合掌。

2024年1月10日 記

back number

第一部

『第一章 世界の果ての島』

はるか昔、ホシナ族の祖先は北方の故郷を出て南を目指した。長い旅の果てにたどり着いた島で、黒曜石の鉱山を得る。しかし、黒曜石の採石、加工、使用、すべて島の『王』の特別な許可によるものだった。

ある日、ホシナ族のもとにふたりの異国人がやって来た。ネウトラ評議会・学術調査団を名乗る彼らの目的は、絶滅危惧種である巨人族の調査だった。

『第二章 破滅の襲来』

調査行の最中に調査団長・ダーヴェとホシナ族の娘・マミヤの行方がわからなくなる。やはり行方不明の巨人と同様、何者かに拉致されたと考えた調査団メンバーのヒューダーとヤスウは島を後にし、ダーヴェたちの痕跡を追う。航行中の彼らは緊急事態信号をとらえ、発信元のエウメロス王国へ急行する。

『第三章 変態』

エウメロス王国を襲った巨人族はどこから来たのか。ヒューダーはエウメロスのレルを伴って隣国ケストル王国へ。両国の国境をなす険しい山脈のふもとに作られていたのは王家の離宮と闘技場。ひとりの少年を密入国させたかどで、ヒューダーは闘技場に引き出される羽目に。決闘の相手は当の少年。この闘技場が巨人族のホームだと直感したヒューダーだったが、己がイリチャ（槍）と名付けた少年に倒されてしまう。

※・サブタイトルについて。

オタマジヤクシがカエルに、イモムシが蝶に形態が変わるという意味での『変態』です。別の意味ではありません

『第四章 レムリアン・ラブソディ』

ケストルの闘技場でマミヤから渡されたダーヴェの眼鏡には、夥しい量の情報が納められていたことがわかる。それは巨人族の遠い祖先の濃密な記録だった。マミヤに眼鏡を託したダーヴェは南へと向かったらしい。世界の果ての島で仕切りなおしたヒューダーたちは、マミヤ、ヘルガ王女、ダーヴェの探索、そして巨人族の襲撃に遭ったネウトラ評議会本部へ向けて、それぞれ旅立つことになる。

第二部

『第五章 メッサナ』

エウメロス王国はヘルガ王女を取り戻すため、帰国したレル、黄金門市のバイスロイと共に動き出す。王女返還の申し入れを受けたケストル王は、王女にかかっていた魔法を解いて求めに応じるが……

一方、ヒューダーはイリチヤを伴ってメッサナ市に入る。メッサナは総督パンテオラが統治する巨大な石造都市にして知と美の殿堂である。ヒューダーの上司ダーヴェはここを訪れ、巨人族の謎を追ってジャガーのバラムと共にすでに立ち去っていた。ヒューダーはバラムの双子の弟バランケに先導させ、ダーヴェの後を追う。

『第六章 脱走巨人』

ヘルガ王女を乗せたエウメロス機はケストル機に襲われる。コタエと駆けつけたイリチヤとによって全員エウメロス領側に助け出されるが、そこには巨人が待っていた。コタエたちに襲いかかろうとする巨人をイリチヤが阻止するが、それはエウメロスの首都へ派遣された増援部隊から脱落した者だった。搭乗機を破壊され、国境付近の険しい高山にとり残されて身動きできない一行はそこで一夜を明かすことになる。そして夜半、レルはコタエに異変が起こっていることに気づく。

『第七章 メッサナからの逃亡』

知と美の殿堂メッサナで音楽家を志し、歌で多くの人々を魅了したメルノ。ある日突然、メルノに心酔していたはずの人々が当のメルノを攻撃し始める。悪意に満ちた激しい攻撃を見かねた人々は彼女を助けようと進んで支援するが、メッサナ郊外でメルノはひとり放置されてしまう。後戻りもできず湿地帯へと踏み込んだメルノは、幻を見、神と名乗る者と言葉を交わす。同じころ、ヤスウはネウトラ評議会本部を発ってメッサナを目指していた。

『第八章 IRITIYA』

人々に多大な影響を及ぼす力を秘めた芸術家を見出し、恐怖の中に放逐する。冥界の王が白羽の矢を立てたのが音楽家メルノだった。王は部下のベネトナシュを使ってメルノとメッサナの人々を恐怖に陥れようと画策していたのだった。メルノは死んだと報告するベネトナシュ。だが冥界の王はひそかにそれを疑う。

一方、イリチヤとマミヤとは、エウメロスの首都へ向かうレルらと別れ、メッサナ市を目指す。が、メッサナ総督府には異変が起こっていた。イリチヤは外部の隠れ家に潜んでいたコモラを探し出し、パンテオラ総督がアンベレオ本国の兵士に連れ去られたことを知る。

『第九章 原子の火』

のちの世に黄金郷と呼ばれるものを、メッサナ市は持っていた。総督家の本家筋にあたるアンベレオ王家は、拘束したパンテオラの身柄と金脈とを引き換えにしようと画策を始める。パンテオラの代理を務めることになったパルダリス氏は本家の要求に激怒、そんな中、ネウトラ評議会がメッサナが抱える化学者の協力を要請してきた。評議会は巨人族侵攻対策のために原子炉を造ろうとしている。メッサナの化学者の長メンドルプは、それを知って震撼する。

2011年の原発事故を踏まえた『火精霊に聴く -原子の火に関する一問一答-』を収録しました。

『第十章 二極世界』

死神はメッサナの金脈がアンベレオの手に渡ることを好まない。その思惑は、アンベレオ王家とメッサナ総督家との全面的対立へと向かわせる。それは多くの物資をアンベレオ王国に依存する諸国と、知と美をメッサナから持ち帰った各国の人材たちとの対立へと発展する様相を見せていた。また、メッサナ化学者集団は巨人族対応を巡ってネウトラ評議会と対立する。

ヒューダーの要請に応じるイリチヤの旅立ちをひとりで見送るヤスウ。並外れた知と美の都の凋落が、ヤスウの目の前で始まろうとしていた。

第三部

『第十一章 天津甕星』

黒曜石に携わる人々・ホシナ族は原住民の民ではない。若い兵士アマセオは、昔、星に導かれてやってきたというホシナ族に親しみと興味を覚える。

ホシナ族と交わるうちに美しい青緑色の幻獣を見かけ、ますますホシナの地に惹かれるアマセオだった。

そんな中、アマセオの実家の使者がやってくる。使者が持ってきた知らせは、アマセオの妻に子どもが生まれたというものだった。族長夫人のオマキは大喜びするが、アマセオは激しく動揺する。生まれた子は三つ子。アマセオ自身も三つ子だった。それは生まれてはならない者だったからだ。

『第十二章 機織り族の野望』

王に献上された見事な織物。かつて王の正后に贈られた腹帯と同じ材質のものに見えたオモイカネは、それに触れたとたん、激的な反応を体験する。現政権の日読みを司る彼は、王に危害が及ぶ懸念からその織物を預かる。

一方、赤子と妻に会うため、帰郷したアマセオ。故郷は鳥を守護神とする神聖な織物の郷。妻の兄、タマシギと語り合ううち、タマシギが一族の持つ織物の権利の維持と織物の技術開発に並々ならぬ意欲を持っていることを知る。家を追い出され、家業に興味のないアマセオだったが、タマシギに対して違和感を覚える。そんななか、アマセオの子が怪鳥にさらわれる事件が起きた。

『第十三章 アマセオとカガセオ』

鳥の化け物がシトリを襲い、三つ子を連れ去った。三つ子の父親・アマセオは化け物を追う。シトリ一門の将来について、追放同然とはいえ嫡男であるアマセオと考えが食い違うことに気づいたタマシギは、この事実を即刻政庁に報告する。

報告を受けたフツヌシは、アマセオがかねてよりホシナ族と接近していることを懸念していた。

この国の仕組みは北極星を中心としている。一方、はるか過去に石器と狩りの技法と共に北からやって来たホシナ族は金星に導かれていたからだ。しかしこの国にとってホシナ族はなくてはならない存在であることがフツヌシを悩ませる。

アマセオの子をさらったのは、出生後に殺されたはずのアマセオの弟だった。弟はシトリの後継者であるアマセオの力になるべく、殺された後タマシギに憑依し、シトリを導いてきたことを告白する。ところが、タマシギの目的のためには手段を問わない強固な性格は、得体の知れないモノを深淵から呼び込んでしまった――

『第十四章 ヤサカオ 立つ』

ホシナ族の黒曜石事業拡大は政府から仕掛けられた罠だった。権利の拡大解釈を理由に、政権の軍部を司るフツヌシはホシナ族を討つべく行動を開始する。フツヌシはまた、アマセオを陥れる訴えをもタマシギから受けていた。

夜陰に紛れてホシナ族の地を訪問したスクナは、アマセオにすぐにこの地を離れるよう進言する。フツヌシの狙いを攪乱するためだった。そしてスクナは、タマシギに憑依したカラスの正体を知る。ミツハの中のメルノは言う。それは死神だと。

死神の登場に動揺したメルノはホシナ族を抜けようとするが、スクナから厳しい叱責を受けるのだった。

一方、アマセオと懇意の仲のヤサカオは、ひとつ問題を抱えていた。ホシナ族を存続の危機に陥れ、ホシナの娘マミヤ失踪のもととなった事件を起こしたゴンがヤサカオの息子だった。族長ホシナがゴンをホシナ族の者として扱ったため、ヤサカオの名は表沙汰にならなかったのだ。そのことを恩義と受け取ったヤサカオは、ホシナ族にかわってフツヌシを迎え撃つ。

『第十五章 ふたつの北極星』

かつて名を奪われ、取り上げられたわが子が意外にも近くにいると知ったミツハは彼女本来の力を取り戻し、カラス-死神と対決する決意を固める。

一方、フツヌシの軍団のひとつが農村を襲って村人を人質にホシナ族に投降を迫り、ホシナの郷をも襲おうと謀る。ホシナ族はもはや退路は断たれたと知り、そのやり方にアマセオは失望と怒りを覚え、フツヌシ、オモイカネに政府の真意を問いただす。

オモイカネは、現王の後継者を巡って政府内で陰謀が渦巻いていることを語る。王と深い関係にあるホシナ族は陰謀の犠牲になり、ヤサカオ族と共にフツヌシを負かしたアマセオは王位を巡る者にとって脅威的な存在になっていたのだった。

はたして、ホシナ族とアマセオの行方は。

第四部

『第十六章 トゥランの七つの洞窟』

冥界王に無断で世界の果ての島に手を出した死神は冥界王の怒りを買ひ、ついに見放される。

一方、ケストルの追撃を逃れた王女ヘルガはついに故国に帰還。信用のおける側近らと情報を交わすうち、ネウトラ評議会が巨人族の襲撃を受けて壊滅状態であること、また、メッサナ市に異変が起これ、封鎖されたことがわかる。そんななか、エウメロスの地下シェルターに逃れてきた黄金門市の皇帝は、エウメロスの生存者全員を地下シェルターに収容し、ひとつしかない入り口を塞ぐことを提案する。大陸の下には遠い過去に造られた巨大な都市があり、エウメロスの地下シェルターはその都市から伸びた枝道のひとつだった。皇帝の一族は驚異的な力をふるって地下道掘削に取りかかる。

『第十七章 ブルー・マーキュリー遭難』

巨人族を殲滅させるべく原子炉製造に意欲を燃やすティコ博士に頼もしい協力者が現れた。評議会西支部のコパーン博士である。メッサナ化学者団と決裂してしまったティコは、コパーンの進言を取り入れ、原子炉から原子爆弾へと舵を切っていく。その様子を耳にした黄金門市の皇帝は、評議会には専門家がないのだと見抜く。いずれにしても地下へ潜ってしまったエウメロスには無関係なことだと思われた。ところが事態は急変する。コパーンがティコへ送った無人偵察機が行方不明になった。偵察機は爆弾の製造仕上げに使うブルー・マーキュリーという素材を掲載したまま、ケストル北方、氷河地帯でコントロール不能になったのである。ケストル王国が遠い昔、氷河の決壊によって洗い流された原野に建設されたことを知ったヘルガはケストルに留まっているバイスロイ救出に動き出す。

『第十八章 王女の冒険』

ケストル王国に向かったスクナとヘルガは、途中、アマセオと出会う。彼はホシナ族と行動を共にしてきたが、ホシナ族が安全な場所で逗留中、単独行動をしていたのだった。スクナらが大任を負っているのを知り、アマセオはケストル北方へと偵察にむかう。

ケストル王パウルと対峙し、国民らに避難を呼びかけたヘルガはバイスロイが王都にいないことを知る。彼は離宮へ招待されていたのだった。ヘルガにはおぞましい記憶の残る場所だったが、バイスロイ救出に急行する。しかし王都よりずっと北にある離宮は決壊した氷河に吞まれようとしていた。

『第十九章 ミクトランへの道』

ケストル闘技場からエウメロス地下シェルターへ移されたアマセオ。レル・ヴァリスは彼自身が保管していた闘技場の見取り図とアマセオが持ってきた情報が一致していること、そしてかつてダーヴェのメガネを解析したコタエの記憶から、ケストル闘技場には巨人族が出入りしていた機構があることに気づく。一方、破壊されつつある闘技場地下にある渦に飛び込んだバイスロイらはどこにも知れぬ場所に到達。バイスロイは到達地の特徴から、それが太古に失われた転送システムであると知る。

第五部

『第二十章 冥界の巨人』

バイスロイ一行を出迎えたのは、ネウトラ評議会のダーヴェ。ダーヴェはケストル闘技場から転送システムを使ってミクトランへ来たのだった。同じ方法で多くのケストル人がミクトランにやって来ていた。いくつもの事情で母国へ帰れなくなったケストル人は、ダーヴェらをつけ狙った。彼らは、転送システムのパスの機能をもつ『評議会の身分証』をもたらしした人間、ヒューダーをも恨んでいたのである。地上帰還の可能性がきわめて低いなか、ダーヴェたちは最大の謎、巨人族がどこからやってくるのかを解こうとしていた。

『第二十一章 メッサナの黄金郷』

ヒューダーとスクナとはホシナの郷について、イリチャについて情報を交換し合う。スクナはその見た目からメッサナからの逃亡者メルノはイリチャの身内ではないかと考えていた。しかしヒューダーは納得できない。メッサナ人とイリチャとでは外見の特徴が違い過ぎるからだ。

かつてメルノは、その名の者は死んだとし、偽名として自らミツハと名乗った。そのことを知ったヒューダーは、『ミツハ』とは水の精霊を表す音であると気がつく。古い伝説によればイリチャの母親は水の精霊である。

一方、メッサナ滞在中のヤスウとマミヤは総督代理パルダリスのもとに身を寄せていた。そこへメッサナの王家アンベレオの王、行幸の通達が届く。それは国王の行幸完了まで現在メッサナ市にいる者はその場を動いてはならないという命令でもあった。

『第二十二章 物質化した太陽光線』

黄金の力とは世界を清浄し、活性化させるもの。その働きは太陽と同質である。誰もが受け取ることのできる太陽光線と同様に、人は誰も黄金を受け取り、その浄化と活性化エネルギーによってより偉大な存在へと上昇する……

しかし黄金時代を象徴するメッサナ市は、音楽生迫害事件をきっかけに内側から崩れ、メッサナ市の

本家アンベレオ王国の植民地では黄金が高騰を始めた。
いまだ対処の手がかりもつかめない巨人族問題と相まって、世界は混迷を深める。

『第二十三章 ミクトラン脱出』

ケストル人ソルドらがミクトランを去った。時と場所を選ばなければ脱出は可能なのだが、ただ、計り知れない危険を意味していた。そのために、スクナの脱出計画をダーヴェは強硬に反対する。しかしヒューダーは絶対に安全な道などないと言い、反対するダーヴェを牽制する。そしてスクナともう一名の枠に、バイスロイはヘルガを推す。彼はメッサナの音楽生迫害事件の被害者たちはかつて親交を結んだ者たちだと知り、物理的にメッサナに最も近い場所であるミクトランに残ることを選んだのだった。

ミクトランの怪物の群れが大挙して押し寄せるなかを、スクナとヘルガは脱出を決行する。

『第二十四章 トーラの鷲の園』

ヘルガはアマノカガセオによって大陸中南部の森林地帯へといざなわれる。陸上からはとうていどり着けない険しい地形のなかに現れた湖に浮かぶ島・トーラで、ヘルガは去る大災害の直前にケストル宮廷から退避したはずの家臣たちと再会する。そこは掘削中の地下道がいずれ到達する地、出口でもあった。

一方、ミクトランに残った一行の巨人族探索は遅々として進まず、仮面の怪物の執拗な攻撃に手を焼いていた。怪物群の攻撃を一手に引き受けているイリチャに、戦いを宿命づけたかのような名づけをしたことにヒューダーは責任を感じていた。

『第二十五章 イリチャの行方』

ヘルガからの贈り物である指輪を追ったイリチャは死神ベネトナシュの手に落ちた。しかし、ミクトランの主・テクトリが横取りする。わけもわからず嘲弄されるイリチャだが、巨人族が造られる現場をついに目にする。そこはミクトランの中に作られた異次元空間で、製作者はメッサナを追放された化学者プラトニオ。評議会の爆弾が巨人族を殲滅すると同時に地上のあらゆるものを汚染したことがわかると、テクトリもプラトニオも慄く。評議会の爆弾とは、メッサナが封印していたきわめて危険なものだったのだ。そんな彼らの前に現れた男が巨人族製造を弾劾したことによって巨人族問題は集結しそうにみえたが、地上を汚染したのが地上の人間であると知ったイリチャは激しく落胆する。

第六部

『ジャガー狩り』

ミクトランで行われていた巨人族製造はある人物の一声で打ち切られた。ミクトランは冥界から切り離され、ダーヴェたち三名はイリチャの懇願により地上のメッサナへと送られた。巨人族の危機が無くなり、ミクトランを脱出できたことよりも、その急転直下の転換ぶりに三名は戸惑う。なによりイリチャが謎の人物に連れ去られてしまった。彼らは敗北感と無力感とに苛まれる。

メッサナの前の提督パンテオラを飼い主としていたジャガーのバラムとバラケもあるじを失った現実と直面し、失調し始める。そんな折、メッサナ中のジャガーがすべて集められ、くにが管理するという通達が発表された。

『第二十七章 仮面の神』

黄金門の後継者バイスロイは身分を隠したままメッサナの街中に出、メルノの生家跡でアンベレオの女先遣隊長シパドと出会う。バイスロイが彫刻を得意とする芸術家だという話を真に受けたシパドは、彼に記念硬貨を造らせるため、アンベレオ王都へと送る。ヒューダーたちは出かけたまま戻らないバイスロイを心配するが…

メッサナ市奪還に湧き返る王都だったが、王場内には緊張が走っていた。アンベレオが信奉する神が、その代理人を送り込んできたのだ。そして記念硬貨に彫られるべき人物は、国王から神の代理人へと変更になった。

バイスロイはモデルである神の代理人と対面する。

『第二十八章 9かける3番目の王国』

メッサナ市奪還記念硬貨に刻まれる人物とはイリチャだった。かつてメルノが歌った歌を耳にして動揺するイリチャだったが、かえってバイスロイに対して心を閉ざしてしまう。

モデルのデッサンを携えてメッサナに戻ったバイスロイは、女先遣隊長シパドが新たな総督として就任することを知る。シパドは本来彼女のベレオーサ家のものだった土地を取り返し、治めることを当然と考えていた。そして二日後の就任式の折り、バイスロイに夫として、隣に立つよう求めるのだった。

古い昔話『9かける3番目の王国物語』には王と別れた后が特徴のある指輪を持っていたことが描かれている。それと同一と思われる指輪を持って現れたイリチャ。彼が金貨に刻まれたことはいったい何を意味するのか。

『第二十九章 ベレオーサ市の惨劇』

新総督就任の日、シパドはおそろしいことを企んでいた。衆目のなか、巨人族にケストル人ソルドらを襲わせたのだ。バイスロイに求婚を断られた腹いせだった。新総督お披露目を見物にきた市民たちはシパドの残虐な性格を知り、眼前で繰り広げられた惨劇に恐怖に慄く。ダーヴェやヒューダーの衝撃はさらに大きい。ソルドたちを襲った巨人に見覚えがあった。

アンベレオは巨人族を商売に利用できると考えていた。それがアンベレオの思惑だったのだ。

しかし総督就任の儀式を血で汚したことは本国の怒りを買い、シパドは呼び出しを受けアンベレオへ向かう。王家から厳しい叱責を受けたシパドの兄・ドゥルは妹に激怒し、同行してきたバイスロイを深夜の王都へ放り出してしまふ。

『第三十章 金星の巫女』

旧メッサナ市の住民は新総督就任の日に見せつけられた恐ろしい光景に深く傷つき、新総督への反感を持ってないほど委縮してしまった。そんななか、マミヤは金星神への祈りを捧げるために神殿へ向かった。

同じころ、バイスロイが身に着けていた黒曜石の短剣が金星神に関わるものと知ったシパドは仕返しを企む。

一方、世界中に広がるネウトラ評議会加盟国は、ネウトラ・ポリス消失と評議会職員の安否の説明を求め、世界に向けて声明を発した。アンベレオはその声明を盾に、新ベレオーサ市滞在中の評議会員全員の出頭を求めた。ポリス消失の経緯を知るダーヴェとヒューダーは出頭要請に応じようとするが……

金星神の神殿に詣でていた者全員が当局に捕らわれるという事態が起きた。それはさらなるバイスロイへの意趣返しを企むシパドの仕業。神殿にいたマミヤはその網にかかってしまふ

奥付

Salamander in the circle

第三十一章 ボムソワールの劇場

2024年1月20日 初版発行

著者 峯村 明 [E-mail](#) blog [D & R](#)

表紙素材 [「月とサカナ」](#) [イラストAC](#)

制作 Puboo

発行所 デザインエッグ株式会社
